

現代社会における実践知の越境に関する先行研究とその意義：
 世代を超えて経験が伝わっていく仕組みと学校教育の限界
 Previous Studies and the Significance of Boundary Crossing about
 Practical Knowledge in Modern Society: Mechanism to Transfer
 Experience over Generation and Limitation of School Education

竹内 一真

Kazuma Takeuchi

要旨：近年、急速に変化する経済に合わせるかのように、習得に時間のかかる実践知が急速に消失してきている。一方で、伝統工芸や伝統芸能の分野では一度廃れてしまった実践知が復元することを通じて、興隆を極めていくという事例が散見される。本稿ではこのような世代を超えて実践知が伝わっていくことを世代の越境として捉え、越境というテーマが心理学においてどのように扱われてきたのかという整理し、今後の研究にどのような視点が必要となるのかを示す。

キーワード：実践知、世代の越境、復元、ナラティブ・アプローチ、循環的発達

Abstract: This study examines previous studies of boundary crossing about practical knowledge. Practical knowledge which takes so much time to acquire is getting disappeared due to rapid economic and social change. However, Practical knowledge in traditional art and dance is revived by people who wish to reconnect the generation. This phenomenon is important for growth of the economy. Because reviving the practical knowledge sometimes leads to create innovation by connecting the new knowledge. I call this phenomenon boundary crossing of generation. This study clarifies previous studies of boundary crossing about practical knowledge from the view point of psychology.

Keywords: practical knowledge, boundary crossing of generation, revival, narrative approach, circulative development

1. 問題と所在：急速な経済的変化と失われる技術

現代の経済においては物事が急速に動いている。例えば、経済産業省が出した 2007 年度の『ものづくり白書』によれば、製品サイクルが短縮化してきていることが広範な産業において確認されている（経済産業省、2007）。同白書によれば、その要因として、市場ニーズの変化が急速になってきていることや、技術の世代交代が急速になっていることなどをあげている（経済産業省、2007）。また、経済産業省の平成 23 年度産業技術調査では、製品サイクルが短期化する要因として短期的に成果を出すよう上層部からの要求が激しくなっており、そのため中期的なテーマ立案が困難になっていることが浮き彫りとなっ

ている（経済産業省、2012）。ライシュは現代社会において、買い手は選択肢がこれまで以上に広がっていることで、より有利な取引を得ることができるようになっていると指摘し、その反面、売り手はポジションがより不安定になり、それゆえ、経営者を技術革新に走らせると結論付けている（Reich、2000）。

経済が急速に変化していくような状況に身を置いている経営者からすれば、人材も極めて効率的に、かつ流動的に活用していく必要が出てくる。例えば、関西経済連合会が2013年に『「雇用の柔軟化・流動化」に向けた考え方』という報告書を出している。その中で「適材適所の人材配置を可能にするためには、企業間の労働移動を円滑にし、流動性を高めることが必要である。雇用の流動性が高まれば、各企業は、経営環境に応じて柔軟に労働力の調整を行うことができるようになる。特により多くの労働力を必要とする新興産業や成長産業が、人材を獲得していくことも容易になる。それは、産業育成による国内のマーケットの拡大を支えることにつながる」と指摘する。また、日本経済団体連合会は2013年に『労働者の活躍と企業の成長を促す労働法制』において、「労働分野の規制は、事業活動の柔軟性を下げ、多様な働き方の選択を狭めることで、企業の成長に必要な人材を新たに採用する余力を弱める直接の原因となっているため、その見直しが急務である」と指摘する。このように、企業においては変化の激しい社会に適応するように、人材の流動性を高めることに非常に積極的になっているのである。

変化の急速な時代において求められる人材は、変化する社会の中で柔軟に対応し、学び続けることができる人材である。経済産業省は2006年に前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力などの3つを主要能力とする「社会人基礎力」を定義づけた。本田はこのような「個々人の実質的・機能的な有用性に即して個々人を遇する（本田、2005：p.21）」ような選抜の形をハイパーメリトクラシーとよんでいる。その上で、本田はハイパーメリトクラシー下に必要な人材とは柔軟な専門性（flexpeciality）を持つ人材であると指摘する（本田、2011）。柔軟な専門性とは「特定の専門領域や分野、テーマを入口ないし切り口としながら、徐々にそれを隣接・関連する領域へと拡張・転換していくことを通じ、より一般的・共通的・普遍的な知識やスキル、あるいはキャリアを身につけていくプロセス（本田、2011：p.79）」を指す。例えば、2012年の中央教育審議会の答申『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』には「社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠」と指摘している。このように一定の専門性はありながらも、社会の変化に応じて自らの専門性を更新し、新たなものを産み出していくような専門性こそが現代において求められているのである。

本田の述べるような柔軟な専門性とは、柔軟ではない専門性は淘汰され、消えていく可能性があるということを暗に示している。企業が成長産業や新興産業へ人材を容易に解雇できたり、雇用できたりするのであれば、結果として柔軟に対応できない専門的な実践知

を有する人材は労働の場から消えていくこととなる（Bauman、2000：Sennett、2007）。そればかりか、柔軟性が過度に強調される社会においては、職人が有するような時間のかかる修練のプロセスとその結果身につく深いこだわりは企業にとって否定的なものとして扱われるようになる（Sennett、2007）。結果、職人の実践知は徐々に失われていってしまうのである。

ここで、習得に時間のかかる、深いこだわりを必要とする実践知を消えゆくままに放置してよいのかということは当然議論の対象になってこよう。社会の変化が急であればあるほど、伝統的な実践知だけでなく、少し古くなっただけの実践知であっても消えていってしまう可能性がある。このような途絶えていく実践知は、場合によっては将来において新たな革新を生み出す可能性もあり、それゆえ、産業の原動力ともなりえる。そのため、実践知の喪失は未来に対する大きな損失になりかねない。従って、途絶える実践知に対して続く世代の人々はいかに向き合うべきなのかということは切実な問題として浮上してくるのである。

2. 本稿の目的：途絶える実践知と復活する実践知

近年、急速な生活様式の変化や海外からの安価な輸入品の増大などによって伝統工芸品の需要は大幅に低迷している。2011年に行われた伝統的工芸品産業振興協会の調査によれば、1990年には生産額ベースで5000億円あったものが、2009年には1281億円となっており、昭和50年代のピーク時と比べて4分の1となっている。生産規模の縮小と共に、従業員を雇用し続けたり、そもそも生業として営んだりするのが難しくなっている。2009年の伝統的工芸品産業の企業数は15万ほどで、従業員は8万人ほどと生産の落ち込みと合わせて倒産や離職者の落ち込みが下げ止まらない状況となっている。

結果として特にしわ寄せを受けているのが、若年・中堅の実践知の担い手である。例えば、伝統的織物や染色品では生産や売り上げの落ち込みと合わせ、それまで養ってきた内弟子などは維持できなくなっており、さらに従業員のリストラも起きている。このような影響で生産を担いながら技術・技法の習得を行い、次の人材を輩出し、新たな生産、産地の担い手として巣立っていくという育成のサイクルを維持できなくなっているのである。本来であれば次の世代を担う若手や中堅が辞めていけば、当然のことながらその実践知はやがて衰退するということになる。

このような後継者不足という問題は世界的な現象であり、それゆえ、ユネスコによる無形文化遺産の保護に関する条約（以下、無形文化遺産保護条約）に結び付くことになる。無形文化遺産保護条約は急速に変化する社会の中で有形の文化遺産と同じように無形の文化財に対しても保護を行っていくというユネスコが主導した世界的な条約であり、2006年に発効されている。日本においては2008年の能楽、人形浄瑠璃、歌舞伎に始まり、2014

年には日本の手すき和紙技術が無形文化遺産として登録されている。

後継者が途絶えたり、あるいは途絶える一步手前で保護されるような実践知がある一方で、途絶えた後に復活する実践知というものも散見される。例えば、江戸時代後期の薩摩藩の藩主である島津斉興の名によって作られていた薩摩切子は、薩英戦争や斎興の死などによって一時途絶えてしまう。しかし、1985年に復活し、現在では鹿児島県を代表する特産品として成長している。また、兵庫県に伝わる杉原紙は平安時代から江戸時代に渡り、武家や公家に贈答品や献上品として使われていた和紙で、当時の生産量や紙の品質から日本一の和紙として名高かった。しかし、紙の機械化などが進み大正時代には当該地域から紙漉き職人がいなくなってしまう。しかし、1975年には復活に成功し、現在では兵庫県重要無形文化財として認定されるまでに至っている。

薩摩切子や杉原紙のように、途絶えていたものが復活するという事例だけでなく、長く続く実践知において改めて歴史を見つめ直し、実践知を一新させることで新たにその価値を知らしめるということもある。備前焼は安土桃山時代におおらかで気品あふれる茶陶で一世を風靡することになるが、江戸から大正に至るまでに廃れていってしまう（上西、2012）。かろうじて続いていた状況の中、新たに安土桃山時代の作品を現代に復元させ、その後、備前焼が現在の全国的に認知されるような状況に至っているのである（上西、2012：山本、2015）。

ここまで見てきたように、実践知に関しては途絶えるものが目立つ一方で、復活し、逆に興隆を遂げている実践知すらある。いずれにしても途絶えたり、過ぎ去ってしまったたりした経験はこの世から完全になくなるわけではなく、何らかのきっかけで復活をし、後続の世代に伝わっていく。このような実践知の衰退、衰退から復活、さらに興隆という現象は当然のことながら伝統的な工芸品だけに現れるものではない。例えば、一時は廃れていた磁気テープが東日本大震災以後にバックアップ用としての優位性が評価され、売上が伸びているという事実がある。この磁気テープの再評価に見られるように、ある技術が一時廃れてしまった後に、それが見なおされ、売上を伸ばすということは伝統工芸の世界だけではないのである。このように世代と世代の再接続や関係性の再構築というテーマは変化の速い時代であればあるほど重要になってくるテーマであると考えられるのである。

ここで広い意味で世代から世代へと伝承者の有する経験が伝わることを世代の越境として定義づける。また、いったん途切れた実践知を再度立ち上げ、後続世代に伝えていく現象を復元として措定するならば、復元は世代の越境の一つの重要なテーマということになってくる。そこで、本稿では心理学において越境がどのように研究されてきたのかということを見ていく。その上で、今後、世代の越境という観点からどのような研究が必要とされるのかということをも明らかにしていく。

3. 越境における発達的な視座：水平的発達観と循環的発達観

一般的に生成する個人の行動を文化歴史的な文脈の中で捉えるアプローチを心理学において、社会文化的アプローチと呼んだり、社会歴史的アプローチ、状況論的アプローチと呼んだりする。本稿では以下社会文化的アプローチと呼び、このアプローチにおいて越境がどのように捉えられてきたのかを明らかにしていく。

近年の社会文化的アプローチの主たる関心は一つの共同体における発達・学習を捉える研究から複数の共同体を通じた発達・学習を対象とする境界（文脈）横断論へと主たるテーマが移ってきている。境界横断論とは単一状況に埋め込まれた学習過程に着目するそれまでの研究（例えば、Lave & Wenger (1991) など）から、ある共同体と別の共同体との間の乖離やつながり、それらの間をまたぐ過程でみられる発達の变化といった複数の状況間をまたぐ学習・発達過程に着目する領域である（香川、2008・2011；有元、2012；香川・青山、2015）。Y. エンゲストロームはこれまでの発達論が「段階」という階段を垂直的に登るように指定されていたのに対して、境界を横断する水平的な移動による発達の視点が重要であると指摘している（Engeström, Y., 1996）。特に現代の熟練者は常に新規な、そして解決や解決に至る手続きを定めるのが難しい問題に取り組んでおり、領域を超えて解決に必要な情報やツールを見つけたり、助けを求めたりすることが必要とされるような状況におかれていることがその背景として指摘されている（Engeström, Y., Engeström, R., & Kärkkäinen, 1995）。境界横断論に関する研究として、例えば香川らは看護学生を対象に校内学習と臨地実習という二つの異なる状況間を移動することを通じた動機の変化や異なる状況におかれた人工物や対象との関わりを通じた発達の变化を示している（香川・茂呂、2006）。

香川はこれまで行われた境界横断論に関する研究を3つにまとめている。すなわち、状況間を一方から他方へと移動する状況間移動、目的を達成するために一時的に状況や共同体を移る手段的横断、異質な文化が同じ時間や場所で交わるハイブリダイゼーションである（香川、2011；香川、2015）。これらいずれのアプローチであれ共通しているのは、共同体と共同体を横断したり、重なり合ったりすることを通じていかなる発達を達成するかということにあり、それに基づいてどのような支援が可能なのかということを考える点にあり、それこそが境界横断論における主たる関心事といえよう。

また、近年では野火的活動（Engeström, Y., 2009）に関する研究なども展開されている。野火的活動とは分散的でローカルな活動や共同体が同時に至るところで形成され、広がり、相互につながっていくということを伴った活動を指す（上野、2011・2012）。Y. エンゲストロームも指摘するように、境界自体もあいまいな共同体を成員が相互にインフォーマルな関係を持ちつつ、水平的に移動しながら達成する学習や発達に焦点を当てるのが野火的活動といえよう（Engeström, Y., 2009）。従って、野火的活動は共同体のあり方や参加の

形式は変わっていても基本的には境界横断論に含まれるものといえる（上野、2011）。

ここまで近年の社会文化的アプローチにおいて越境という観点から積極的に進められてきた境界横断論についてみてきた。境界横断論では複数の共同体に参加することを通じた水平的な移動による発達に焦点が当てられており、そのため、先行する世代から実践知を受け継ぐということはどういうことなのか、あるいは、共同体の参加や共同体間の移動を通じて獲得した実践知を個人がどのように後続世代に伝えるのかといった世代の越境に関するテーマは十分に焦点が当てられていないのである。

近年の発達の研究においては世代の越境という現象を捉えることを可能にする水平的な発達観とも、垂直的な発達観とも異なる新たな視点も提示されている。先に確認したように、エンゲストロームは階段を上っていくような垂直的な発達観を批判し、水平という概念を軸に境界横断論の礎を築いた（Engeström, Y., Engeström, R., & Kärkkäinen, 1995 ; Engeström, Y., 1996 ; Cole & Gajdamashko, 2009 ; 有元, 2012）。興味深いことに、やまだも垂直的な発達観を批判し、新たな発達のモデルを提示している。やまだはこれまでの発達モデルが「直進的・進歩主義」であると同時に「一方向的で不可逆的」であると指摘し、循環を基礎概念においた生成的ライフサイクルモデルを提唱する（Yamada, 2002・2004 ; Yamada & Kato, 2006 ; やまだ, 2011）。やまだは生成的ライフサイクルモデルを個人は世代と世代の関係性のなかに埋め込まれており、世代や共同体のライフサイクルを中心にナラティブモード（Bruner, 1990）で捉えるモデルとして措定する（やまだ, 2011）。

生成的ライフサイクルモデルの興味深い点は世代や共同体のライフサイクルを中心に捉え、個人はその一部として記述する視点である。我々が通常発達と聞くと、個人が子供から大人に至るまでどのように成長したのかという垂直的な発達の視座で考える。しかし、循環的な発達観の視座に立つのであれば、個人はあくまで先行世代から受け継いだものを後続世代に伝える存在なのであり、その意味で媒介者となる。これを復元に関して当てはめるのであれば、復元して終わりなのでなく、復元した実践知や実践知を通じて産み出された成果物が流通し、後続世代に伝わっていくことが重要であるということになる。いずれにしても、水平や垂直といった発達の視点と一線を画し、新たに循環という視座を取るのであれば、先行世代と伝承者、または伝承者と後続世代という発達を通じた世代と世代の関係性に焦点を当てる必要が出てくるのである。

4. 社会文化的アプローチにおける世代の越境研究に関する先行研究

社会文化的アプローチから世代の越境に焦点を当てる研究は十分に行われているわけではないが、先進的な研究が存在する。本研究では茂呂（1999）によって行われた復元に関する研究を取り上げることとする。茂呂は原爆によって消えた街の復元に携わる人や京都の公家屋敷の半解体修理に関わった技術者や専門家などからインタビューを行っている。ま

た、宮大工などの著作物も参考にしながら、復元を社会文化的アプローチの観点から読み解いていく。そもそも、茂呂が復元というテーマに取り組むきっかけはヴィゴツキーの心理学に対する観方にある。茂呂によれば、ヴィゴツキーは「心理はむしろ間接的に再構成されるべきものである、そのような意味で歴史的研究の対象である。しかも、心理の歴史を貫く中心点を再構成することが心理の復元であり、心理学は歴史的な間接科学だ、ヴィゴツキーはこう考えていた（茂呂、1999：p.3）」と指摘する。茂呂はヴィゴツキーの心理学に関する原理的方法論を指し示す 1 つのキーワードとして復元という言葉を描定する。その上で、それでは普通の人々はどのように復元という行為を行っていくのかという形で問うのである。「専門家でなくとも、他者の心理あるいは他者の行為を理解する。アカデミックな場面以外にも日常的に行われる。他者の行為理解と他者の心理理解のモデルに、復元のメタファーを拡張することができるだろう。復元の拡張は、ヴィゴツキーの可能性の一つに数えられよう（茂呂、1999：p.182）」と指摘している。

茂呂は復元に関する活動を調査する中で、その特徴を複数の観点からまとめているが、本稿との関係から 3 つにまとめることとする。1 つ目が 2 重の疎隔、2 つ目が活動システムの回復、3 つめが独自性の追求である。1 つ目の 2 重の疎隔とは、復元に際してはまずオリジナルが失われている。これが一つ目の疎隔であり、2 つ目の疎隔は当時の活動形態と現在の活動形態は異なっており、これら二つの異なる時代が生み出す疎隔である。2 つ目が活動システムの回復とは復元に伴って、単純に何かの対象物だけが復元されるのではなく、ヴィゴツキーの 3 角形に基づいて行為 - 対象関係、人的関係、人 - 道具連関などのネットワークも復元されるということを目指す。そして、最後の独自性の追求であるが、復元は単純に元のモノを復活させる他だけで終わるだけでなく、しばしば非常に創造的な形を産み出すということを指摘している。

このような特徴を見たらうで、茂呂は復元を学習という観点から捉える。即ち、「通常の学習過程では、基準原器の不在はかくされている。復元は、基準原器を欠いているからこそ、復元となりうる。復元のオリジンは不在であり、そのことは学習の基準原器の不在を暴露することになる。このような意味において、復元は学習の一つの変異でありながら、むしろ学習のプロトタイプであり、学習の具体的普遍とみなすことができる（茂呂、1999：p.189）」と指摘するのである。茂呂の視点に立つならば、広く学習全般においてはお手本を見ながら、そのお手本と全く同じになるようになることが学習というわけではなく、むしろ教師と学習者の不断のコミュニケーション過程の中で学習者が自らの行為を修正していく積み重ねが学習と言える。復元にしろ、一般的な学習にしろ、コミュニケーションを通じた学習には変わりない。復元を見ることで、学習という行為自体が基準原理の不在を見出させる 1 つのポイントとなりうるというのが茂呂の主張といえよう。

ここまでみてきたように、茂呂の復元研究はヴィゴツキーの心理学における原理的な方法論を一般の人々はどのように捉えているのかという視点からのものであった。そして、

その結果、2重の疎隔、活動システムの回復、独自性の追求といった復元の特徴を捉えた上で、復元研究はあらゆる学習は基準原器の不在という状態で進められるという点を気づかせる重要な現象であると考察を進めるのである。

5. 世代の越境研究に関する先行研究の問題点

茂呂の研究は示唆に富んでいるが、一方で世代の越境という点から考えるならば世代と世代の接続に関する視点が非常に弱いという問題がある。具体的には、失われた世代との接続の正統性、復元を行った時代性という2つの観点からより深く考えていく必要がある。

一つが失われた世代との接続の正統性という問題である。これはすでに失われてしまった技術や文化を指導する先行世代がないのにも関わらず、受け継いだという正統性をどのように担保しているのかという問題である。直接的に指導を受けていても正統性は大きな問題となりえるが、それが世代は断続しており、直接的に指導を受けることができないという状況ではなおさらということになる。復元に際してはすでに当該の実践共同体（Wenger, 2000）がなくなっている場合が多々ある。その上、教を乞う指導者がいないとするならば、自らが正統な後継者であるとしてなぜ意味づけることができるのか。

実践知の学習において重要な知見を残している Lave らは学習における正統性の議論において語りの重要性を指摘している。具体的には「ことばの問題は熟練者の役割についての問題と同様に知識の伝達に関わるというよりも、むしろ参加の正統性と周辺性へのアクセスに関わる問題」（Lave & Wenger, 1991:p.89）と言及したうえで、共同体への参与を通じて実践について語ることで実践の中で実践の中で語ることの両方を学ぶことになること述べる。その中で特に後者の機能に関して「成員たることをしるしづけることと同様に、記憶と内省の共同形態を支持する（さらに同様に、実践についての語りも、ひとたびそれ自体が実践の一部になったならば、通常は何らかの点で分離されてはいるが、やはり両方の語りを含むようになる）（Lave & Wenger, 1991:p.95）」と指摘している。

この Lave らの正統性と語りの関係性に関する指摘は次のような例を考えるとわかりやすいであろう。過去に途絶えた染物の技術を復元したという伝承者がいたとする。周囲の人や購入する人はその伝承者に過去の途絶えた技術はどのようなもので、それは今の伝承者が作っているものにどのように反映されているのかということを知ることになる。その時、伝承者が過去の染物の特色や自らが復元した染物と過去の染物との関係性を十分に語れなければ、周囲の人はその人に対して不信感を抱き、正統な後継者として認めることはできないであろう。この事例を考えてみてもわかるように、失われた実践知に関しては実際の技術的な側面と合わせて、いかに意味づけるのかということが非常に重要なのである。

一度世代が断絶してしまえば、部分的であれ、語りが失われることになる。そのため、失われた実践知において何がその実践知たらしめていたのかという、語りの再生を行っていかなくてはならない。場合によっては伝わっている物語を探したり、再構築したりする必要もあろう。例えば、かつては素材の良さを引き出すことでこれまでにないくらい美しい黒の漆器があったとして、現在で化学塗料は同じ色あるいはより黒い色が出せるのであれば、場合によっては自然の素材を使った漆黒であったり、地元の素材にこだわった漆黒であったりと意味づけを微妙に再構築する必要が出てこよう。また、技術的にも過去作られた状況と全く同じものをそろえるというのは難しいことであろう。その際には部分的に現在手に入るもので置き換えたり、作りかえたりしなくてはならない。このように実践知を復元するにあたって、過去のもので全く同じものを再生はできない以上、現状できる最大限のもので復元させ、同時に過去の語りを再構築した上で、自らの正統性を訴えていく必要がある。このように、正統性や正統性を得るに至るまでの発達のなプロセスはどのようになっているのかというテーマが大きな問題となってくると考えられるのである。

次に復元をさせた時代性という問題である。時代性というテーマを考えるにあたっては復元に生じる創造性という点を考えていく必要がある。茂呂は復元における創造性に関して「復原は、ただ残されたものをなぞるだけにとどまらず、きわめて創造的な行為として出現する（茂呂、1999：p.186）」と指摘している。茂呂も指摘しているように、復元と創造性というのは極めて興味深いテーマである。しかし、復元が文字通り元に戻す行為だとするのであれば、創造的になる余地というのは本来存在しないはずである。なぜならば、創造とは定義的に説明するのであれば、「新しいものを自分の考えや技術などで初めてつくりだすこと（日本国語大辞典第二版）」なのであり、元来あったものを復活させるという行為である復元とは真逆の行為だからである。

ではなぜ真逆の意味を持つ復元が創造的なものとなるのであろうか。過去のもので復元する際には多大な労力を払うことになる。陶器を例に考えてみるならば、復元した陶器が他の地域の陶器のデザインや質感とそれほど変わらないとみなされるようなものであった場合、なぜわざわざ多大な労力やコストをかけて復元したのかという点で周囲から疑問の声が上がることになる。そのため、復元を行う者はなぜ今の時代に該当の実践知を復元したのかということに対する答えを模索することになる。その答え方の一つの形式がより創造的なものが作れると思ったからということになるろうし、それ以外にも町おこしのためなど様々な意味づけ方が考えられよう。仮に創造的なものが作れると意味づけるのであれば、自身の持っている意味づけに沿って作品を作ることになり、最終的に創造的なものになる可能性も高くなるということになるろう。いずれにしても、なぜ今という時代においてその実践知を復元させたのかという時代性に沿った意味づけがなければ、復元を行う者も長期間多大な労力をかけて成し遂げるだけの価値を見出すのが難しくなってしまう。

時代性という視点を深く考えていくと、後続世代との関係というものが視野に入ってく

る。人間の生が有限である以上、自分の生きる時間の中でできることは限られている。だからこそ、今の自分の時代において成し遂げたいことがでてくる。また、自分の時代においてはできないことを後続された世代に残したりや伝えたりするなどといったことが生じてこよう。エリクソンは自身の生涯発達モデルであるライフサイクル論の中で、世代サイクルを完結させる重要な概念として生成継承性を定義づけた（Erikson、1963）。生成継承性は子孫を産みだすことだけでなく、生産性や創造性といった概念を包括するもので、自らがそれまでの発達を通じて獲得してきた経験を後続する世代に残す行為を非常に広くとらえている（Erikson & Erikson、1982）。エリクソンの生成継承性からもわかるように、何かを作ったり、教えたり、残したりする行為は後続世代に対する一つの貢献の在り方といえる。そのため、復元を行った伝承者にとって後続世代を育てることだけでなく、自分しか作れない制作物を残していくことも自らの世代の役割なのであり、後続世代との関わりの一つと言える。伝承者は復元を通じて徐々に当該の時代における自らの制作物の意味や後続世代に残したい価値などが明確になってくる。このような時代性に焦点を当て、その発達のプロセスを明らかにすることは、伝承者にとっての自らの時代の意味づけが明らかになるだけでなく、後続世代との関わりも見えてくることになろう。

ここまで茂呂の復元に関する研究への批判から見てきたように、世代の越境というテーマに関しては大きく正統性と時代性という2つの問題があることが見てきた。先に生成的ライフサイクルモデルにおいても触れたように、循環に基づく発達観に依って立つならば、伝承者における先行世代と後続世代の関係性が重要になってくる。その時に、先行世代との関係性の問題となってくるのが接続の正統性に関する問題であり、後続世代との関係性の中で問題になってくるのが時代性であるといえるのである。無論、正統性と時代性という2点が唯一のテーマというわけではないが、世代の越境というテーマは世代から世代へと伝わっていく際に生じる学習の問題を、どのように捉えるのかという点に関して迫ってくるものといえ、今後研究が必要になってくる重要な問題として考えられる。

6. 終わりに：世代の越境のさらなる探究へ

ここまで世代の越境、特に復元というテーマのもと、社会文化的アプローチにおける越境研究や復元研究などの諸研究をレビューしてきた。ここでは最後に復元から世代越境、教育との相違という2つの観点から説明をした上で、世代の越境というテーマについて考えを深めていきたい。

世代の越境において実践知の復元というのは非常にわかりやすいテーマであるといえる。常識的には継承においては伝承者が現前しており、模倣や住み込みなどの伝承者やその周辺との密なやり取りを通じて経験が伝わっていくと考えられる（生田、1987；野村、2003）。そのため、何らかの理由で一度後継者が途絶えたとすれば、その途絶えた期間を

超えてある実践知を受け継ぐということが出来るのは何故なのかというは我々の常識を揺さぶるからである。一方で、なぜ復元が既存のアプローチで十分に迫れないのかということに関しては深く考える必要がある。ここまで見てきたように、その理由はこれまでの社会文化的アプローチの大きな目的が状況を横断するという水平的な発達に主眼が置かれており、世代と世代の接続といった循環的な発達に関して十分に注意が払われてこなかったという点にある。従って、歴史的に異なる共同体を結び付けるということ自体が既存のアプローチでは弱かったと言える。

ここで、世代から世代へと経験を伝えるという行為は学校教育において日常的にみられるもので、特別なものではないのではないかと主張することも可能であろう。学校という場は日常的な活動や実践から切り離された状況において、普遍的な知識と呼ばれる事柄を教えている（佐伯、1992）。そのため、教師の有する実践における経験や労働における実践知といったものは極めて限定的にしか伝えることができない。このように、学校教育とは定められた知識を生徒に伝えることが主なのであり、数学や英語、国語といった伝えるべき知識が教師にとって自らの経験に即したものと限らない。即ち、学校教育において数学を教える教師は数学者ではないし、数学者を育てるための教育でもないのである（福島、1998）。

このような学校教育は社会から閉ざされた環境で普遍的かつ客観的な知識を教えており、より日常に即した教育を行うべきだという論点は、80年代後半から始まる状況的認知論において非常に密に議論されてきたので、ここでは深く立ち入らない。しかし、2点ほど確認しておく必要がある。1点目が、状況論的認知論において議論されてきたことは状況や環境とのインタラクションというものを重視したものであったとしても、振り返ってみれば垂直的な発達に関する議論であったという点である（竹内・やまだ、2014）。2点目が教師の持つ経験とそれが学習者に伝わっていくプロセスに関しては十分に言及できていないという点である（竹内、2011）。そのため、現実的には通常の学校教育において世代と世代の越境ということに関しては十分に注意が払われれないということになる。

このように考えるならば、状況論的認知論に関する議論が学校以外の場にも多くの影響があったように、世代の越境に関しても実践知の継承という観点から労働と教育が結びつく場面でより必要とされるということになる。冒頭にも述べたように、現実的に社会の変化は急速で、世代と世代の接続が求められる状況は現在においても継続している。備前焼のように継承はされているが、繁栄を謳歌した世代と再接続を図ることで現在の繁栄を取り戻すということもあろう。復元研究はそのような世代の越境に向けた一里塚として研究を進め、さらに幅広く研究を進めていく必要があるものと考えられる。

参考文献

- 有元典文.(2012). 転移と越境——状況間をまたぐダイナミズム. 茂呂雄二他(編), 状況と活動の心理学(pp.116-121). 東京:新曜社.
- バウマン, Z. (2001). リキッド・モダニティ——液状化する社会(森田典正, 訳). 東京:大月書店. (Bauman, Z. (2000). *Liquid Modernity*. Cambridge: Polity.)
- ブルーナー, JS. (1998). 意味の復権——フォークサイコロジに向けて(岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子, 訳). 京都:ミネルヴァ書房. (Bruner, JS. (1990). *Acts of meaning*. New York: Harvard University Press.)
- Cole, M., & Gajdamashko, N. (2009). The concept of development in cultural-historical activity theory: Vertical and horizontal. In Sannino, A., Daniels, D., & Gutierrez, K. (Eds.), *Learning and expanding with activity theory*(pp.129-143). Cambridge : Cambridge University Press.
- Engeström, Y. (1996). Development as breaking away and opening up: A challenge to Vygotsky and Piaget. *Swiss Journal of Psychology*, 55, 126-132.
- Engeström, Y.(2009). Wildfire activities: New patterns of mobility and learning. *International Journal of Mobile and Blended Learning*, 1(2), 1-18.
- Engeström, Y., Engeström, R., & Kärkkäinen, M.,(1995). Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities. *Learning and Instruction*, 5(4), 319-336.
- エリクソン, EH.(1977-1980). 幼児期と社会 I・II(仁科弥生, 訳). 東京:みすず書房(Erikson, EH. (1963). *Childhood and Society*. New York: Basic Books.)
- エリクソン, EH. & エリクソン, JM.(2001). ライフサイクル, その完結(村瀬孝雄・近藤邦夫, 訳) 東京:みすず書房(Erikson, EH., & Erikson, JM. (1982). *The Life Cycle Completed*. New York: W.W.Norton.)
- 福島真人.(1998). モラトリアムとしての学校と教師—徒弟制モデルとその限界. 佐伯胖他編, 岩波講座現代の教育 第6巻教師像の再構築(pp.191-214). 東京:岩波書店
- 本田由紀.(2005). 多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで. 東京:NTT出版.
- 本田由紀.(2011). 転む社会——教育・仕事・若者の現在. 東京:河出書房新社.
- 生田久美子.(1987). 「わざ」から知る. 東京:東京大学出版会.
- 香川秀太. (2008). 「複数の文脈を横断する学習」への活動理論的アプローチ——学習転移論から文脈横断論への変移と差異. 心理学評論, 51(4), 346-360.
- 香川秀太.(2011). 状況論の拡大——状況的学習, 文脈横断, そして共同体間の「境界」を問う議論へ. 認知科学, 18(4), 604-623.
- 香川秀太. (2015). 越境的な対話と学びとは何か——プロセス、実践方法、理論. 香川秀太・青山征彦(編), 越境する対話と学び——異質な人・組織・コミュニティをつなぐ(pp.35-64). 京都:新曜社.
- 香川秀太・茂呂雄二. (2006). 看護学生の状況間移動に伴う「異なる時間の流れ」の経験と生成——校内学習から院内実習への移動と学習過程の状況論的分析. 教育心理学研究, 54(3), 463-484.
- 香川秀太・青山征彦. (2015). 越境する対話と学び——異質な人・組織・コミュニティをつなぐ. 京都:新曜社.
- 経済産業省.(2007). 2007年度版ものづくり白書. 東京:ぎょうせい.
- 経済産業省.(2012). 平成23年度産業技術調査——イノベーション創出に資する我が国企業の中長期的な研究開発に関する実態調査報告書. 東京:テクノリサーチ研究所.
- レイヴ, J., & ウェンガー, E. (1993). 状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加(佐伯胖, 訳). 東京:産業図書.(Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning : Legitimate peripheral participation*. New York : Cambridge University Press.)
- 茂呂雄二.(1999). 具体性のヴィゴツキー. 東京:金子書房.
- 野村幸正.(2003). 「教えない」教育—徒弟教育から学びのあり方を考える. 大坂:二瓶社.

- 竹内一真. (2011). 専門家の技能に関する先行研究と現在の動向——ポスト正統的周辺参加論における「教え手」の位相. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, pp.407-419.
- 竹内一真・やまだようこ. (2014). 伝統芸能の教授関係から捉える実践を通じた専門的技能の伝承——京舞篠塚流における稽古での「こだわり」に焦点を当てて. 質的心理学研究, 13, pp.215-237.
- ライシュ, R.(2002). 勝者の代償——ニューエコノミーの深淵と未来(清家篤,訳). 東京：東洋経済新報社.(Reich, R.(2000). *The future of success: Working and Living in the New Economy*. New York:Knopf.)
- 佐伯胖. (1992). 学びの場としての学校. 佐伯胖・汐見稔幸・佐藤学(編), 学校の再生を目指して 2 教室の改革(pp.193-227). 東京：東京大学出版会.
- セネット, R. (2008). 不安な経済/漂流する個人——新しい資本主義の労働・消費文化. 東京：大月書店. (Sennet, R. (2006). *The Culture of the New Capitalism*. New Haven: Yale University Press)
- 上西節雄. (2012). 備前焼ものがたり. 岡山：山陽新聞社.
- 上野直樹. (2011). 野火的活動におけるオブジェクト中心の社会性と交換形態. 発達心理学研究, 22(4), 399-407.
- 上野直樹. (2012). 学習. 茂呂雄二他(編), 状況と活動の心理学(pp.34-43). 東京：新曜社.
- ウェンガー, E. (2002). コミュニティ・オブ・プラクティス——ナレッジ社会の新たな知識形態. 東京：翔泳社. (Wenger, E. (2000). *Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.)
- 山本雄一. (2015). 備前焼の魅力と技法——伝統と創造. 岡山：ふくろう出版.
- Yamada, Y. (2002). Models of life-span developmental psychology : A construction of the generative life cycle model including the concept of death. 京都大学教育学研究科紀要, 48, 39-62.
- Yamada, Y.(2004). The generative life cycle model : Integration of Japanese folk images and generativity. In de St. Aubin, E., McAdams, D. P., & Kim, T. C. (Eds.), *The generative society : Caring for future generations*(pp.97-112). Washington DC : American Psychological Association.
- やまだようこ. (2005). ライフストーリー研究. 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学(編), 教育研究のメソドロジー(pp.191-212). 東京：東京大学出版会.
- やまだようこ. (2007). ナラティブ研究. やまだようこ(編), 質的心理学の方法(pp.54-71). 東京：新曜社.
- やまだようこ. (2011). 「発達」と「発達段階」を問う——生涯発達とナラティブ論の視点から. 発達心理学研究, 22(4), 418-427.
- Yamada, Y., & Kato, Y. (2006). Images of circular time and spiral repetition : The generative life cycle model. *Culture & Psychology*, 12(2), 143-160.